

園芸研究サラリーマン

株式会社ミヨシ
小 黒 晃

古希が近づき、先人を想うことが多くなってきました。常に師を意識していきたいものです。自分の歳というものは、なかなか実感できないもので、意識は相変わらず、ほとんど進歩していないのではと思われます。今は豊かな時代になったもので、昔は物が無いのが普通。その時々を思い起こすと、時代の背景が分かるようです。

幼少の頃から植物と関わってきました。一生懸命にやっているつもりが、後で思えば、大したことないものです。園芸人生というと聞こえは良いのですが、単に植物にあやつられてきたというだけのようです。なきないことです。

自叙伝の依頼を受け、良い機会なので、ふり返ってみました。なんの参考にもならない他愛のないことばかり、こんなことがあったという事実だけです。

(有)三好商会に入社して

現在は(株)ミヨシです。当時の社長は、三好勲男さん(昭和4年卒)。大学に求人があり、小渕沢で山が近いという理由だけで就職しました。昭和49年4月からの八ヶ岳農場勤務で、3月には新宿百人町の本社でアルバイト。魚躬さん(昭和23年卒)にはたいへんお世話になりました。種子の袋づめや球根の選別など、初めてのことでも面白く、自分で手がけると、その種子や球根がほしくなってくるものです。小渕沢は、まだ中央道も通っていない頃で、閑散とした田舎暮らし。農場住み込みでほとんど休みもなく夢中でした。施設は粗末なもの、場内の舗装もなく、開拓者のようです。停電や断水が多く、蒸気ボイラーは旧式で扱うのに苦労し、各温室まで鉄パイプをつないでいかなくてはなりません。暖房用の温湯ボイラーは失火が多く、夜中に警報が鳴ると、ボイラー室まですっ飛んで行きました。冷蔵庫はクーリングタワーで水を使って冷やすというものです。こんなことでよくやってこれたものです。今思えば、ラッキーだったのかもしれません。小さな会社なのでなんでもやらなくてはならないもので、危険物取扱い、ボイラー取扱いの資格を取り、安全運転管理者にもなりました。

カーネーションの苗生産から始まり、カスミソウ、スターチス、スター、ガーベラ、畠ワサビなどを手がけ、ほとんどが宿根草です。カスミソウは、現在1年中当たり前のようにあります。当時は、挿し芽の発根率を上げることがまず第一でした。販売苗の規格は、砂上げ苗、ポット苗、素掘りの大株と使い分け。今は、プラグ苗で、便利になりました。そして、春にしか咲かなかったものが、秋にも咲かせられるということが分かり、1つ1つ積み上げていったものです。



小渕沢 八ヶ岳農場

ホワイトレースフラワーの商品化

1年草では、ホワイトレースフラワーがあります。南アフリカのカタログで種子を取り寄せ、素性もわからぬまま、とにかく試作。最初は、なんだこの草は?というようなもので、誰も見向きもしなかったものが、その後少しづつ評価され、京都の生け花の先生が、「これええわ」と言ってくださった頃から注目されるようになりました。似たような花ノラニンジンなども試作して、ようやく学名が *Ammi majus* ということがわかり、そして、苗の生産、作型試験、系統選抜と、色々なことが同時進行し、また、おおくの人の力が合わさってようやく1つの商品として確立されたものです。長日では、10cm単位で短小開花、短日ではセロリのおばけのような大きな

ロゼットで、抽苔するとウドの大木です。その後、ピンピネラ（ピンクレースフラワー）など、セリ科の植物をいくつも扱いました。現在、ガーデニングでは、大輪のレースフラワー、オルラヤが多く利用されています。



ホワイトレースフラワー

八ヶ岳農場では、苗の生産と並行して、さまざまな植物の導入試作を行いましたが、商品化できたのは、ほんのわずかです。南米チリでは、現地のプラントハンターと共に山を歩きました。乾燥地なので、日本の気候に合わないものがほとんどです。英国で園芸化され、栽培しているもののほうが利用しやすいものです。

RHS のプラントファインダーを頼りに、何度か英國のナーセリーを回りました。高度成長時代、新しいものどんどん取り入れ、会社も変わり、大きくなっています。北海道の新得町にサホロ農場を開設し、何度も足を運び、露地圃場での試作や生産に関わってきました。6月に雪が降るような所で、だいぶ気候が違います。露地物の宿根草が多くなってきたころで、アストランチア、アルケミラ、トリカブトのビカラーなどが人気でした。2年草では、ヒメヒゴタイがあり、北海道では、特に生産が良く、採種と共に、切り花を市場出荷しました。



平成2年プラントハンティング チリ原野にて
右側が著者

プロジェクト

大小さまざまですが、武田薬品との共同開発では、薬用植物の中から、切り花に利用できる品目を模索しました。ナガホワレモコウ、オオバナオケラ、ミシマサイコなどです。先方の担当者、高村さんは高村正彦氏のお兄さんです。

品種登録

農水省の種苗登録の審査基準作りとして、特性調査をいくつも行いました。メンバーはその都度さまざまですが、試験場の方が多かったように思います。現物をいろいろ調べるので勉強になります。キンセンカの場合、ミヨシで“冬知らず”を登録申請をしたところ、審査基準がないということがわかり、急いで作ることになりました。いろいろすったもんだがあり、結局、“冬知らず”的申請は取り下げることになりました。

第二農場

鶴島久男さん（昭和23年卒）の尽力で、第二農場、カーネーションファクトリーが作られます。その隣にあった洋ラン農場を買い取り、宿根草事業部として、宿根草の生産・販売が始まり、これを足がかりに、次は花環境事業部ができます。第一園芸の小山農場長だった和田大さん（昭和26年卒）を中心に、造園関係の仕事に関わるようになりました。花葉会でも、フラワーランドスケーピング、そしてその後はアーバンガーデニングの本が出版されます。昭和記念公園をはじめ、各地で植栽や展示会を行い、最初は勢いに乗って行け行けムード。しかし赤字続きで、ついに閉鎖。社員が退職する中で、私はガーデンショップ ABABA に配属、現在に至ります。ここから本格的にガーデニングが始まります。



ミヨシのロゴマークを花で象る この後ペレニアルガーデンができる

園芸研究家として

園芸研究家というのは、NHK 趣味の園芸の肩書で、花葉会の方や、他にも大勢おられます。私は一介のサラリーマンで、いったい何を研究しているのか、これから目指すということで納得してもらうしかありません。中学校では理科部、高校で生物部、そして千葉大では植物同好会、なにか自然のものに引かれてこの世界に入ったという流れでしょうか。

高校3年の時、千葉大園芸学部を受験したいと言ったとき、担任の先生はほとんど絶句、あきれています。浦和高校から千葉大園芸学部へというのは確かに少なく、大先輩に清水基夫さん（昭和6年卒）がおられます。ユリの大家として有名ですが、私にとっては、キタダケソウの発見者ということのほうが大きいです。キタダケソウは、南アルプス北岳の特産。6月のまだ雪が多く天候も安定しない時なので、花を見るのはなかなか大変です。山登りが趣味で、八ヶ岳や奥秩父など、近いので日帰りでよく登ります。一度、NHK 出版の方々を案内して、コマクサを見に行つことがあります。その地に長年生育して花を咲かせる自然の姿というのは、やはり感動します。花卉園芸は、なにか感動に欠ける所があるように感じてしまうのですが、多様化する中で、もう少し育てて感動するという面もあって良いと思います。時間をかけることとか、植物の生命力を感じることとか、いろいろあります。一例として、トロパエオルム・アズレウム（青いキンレンカ）。気難しく、草姿も頼りないものです。やきもきと氣をもみながらも、やっと花が咲いた時の喜びは大きいものです。

最近は多肉植物がブームで、これも年数をかけてかかるほど味わいが出てきます。コーデックス類やアガベなど、独特の重みがあります。アガベに似たサンセベリアも、今気になっているものの1つです。多肉植物の本などにはほとんどでていませんが、興味をそられる不思議な植物です。



トロパエオルム アズレウム 青いキンレンカ

執筆活動

原稿依頼が多く、雑誌、新聞、書籍と、随分書いたもので、チリも積もれば山となるです。誠文堂新光社の農耕と園芸から始まり、ガーデンライフや園芸ガイド。タキイ種苗の園芸知識、新花卉、はなどやさい。サカタのタネの園芸通信や NHK 学園などです。学研や世界文化社のハーブや草花の本の監修も手がけ、共同執筆では、農文協の農業技術体系、誠文堂新光社の切り花栽培の新技術、開花調節マニュアル委員会（昭

和32年卒の村井千里さん）の本、同じく村井さん監修の草土出版花図鑑シリーズ、近藤三雄先生監修の「香り植物の緑化デザイン」など。多くて思い出せないくらいあります。NHK出版が一番多く、趣味の園芸テキストを始め、「洋種の野草・山草」などで、平城好明さん監修の「宿根草花」の頃からだいぶ宿根草に関することが多くなり、「ナチュラルガーデンをつくる宿根草」では監修も努め、その次に出版された「日照条件でわかる宿根草ガイドブック」で著者になりました。主な著書には、他にNHK出版の「ガーデン草花」と「ギボウシ」、小学館の「ペレニアルガーデン」があります。NHKみんなの趣味の園芸の植物図鑑では、多くの種類を紹介しています。

テレビ出演

趣味の園芸テキストにちょくちょく原稿を書いていたら、ある日突然、テレビに出て下さいと言われ、もうびっくりです。品目はヘメロカリス、須磨佳津江さんが、ミヨシのガーデンに来られて収録。須磨さんは慣れたもので、いろいろとアドバイスを受けました。その後は柳生真吾さん、山田香織さん、三上真史さんと続き、みなさんさんそれぞれに持ち味があり、細やかな心づかいが身にしみて感じられました。渋谷のスタジオ内での収録は、空気が張りつめたよう、通しで1本のビデオを作るので生放送と変わりません。モニターを見る余裕もなく、あっという間に終わってしまいます。野外の収録は1コマずつで、やはりこのほうが楽です。

しゅみえんダイアリーの場合は、カメラの前で1人で話すので少し勝手が違い、簡単そうに見えても意外に難しく、なかなか思うようにはいかないものです。収録当日も大変ですが、準備はもっと大変。テキスト連動で、原稿が仕上がるといつも息つきますが、ここからがもうひと仕事。開花調節が必要な時もありました。その日に咲いていなくてはならないわけで、これは、展示会も同様です。園芸文化展が、三越や新宿御苑で開催され、なんとかこの日に咲くよういろいろ工夫をしました。ただ加温や電照をすれば良いというわけでもなく、植物の性質はわからないことが多いです。

講演会

話をするのが苦手な私ですが、よくこれだけ講演をしたもので、自分でも感心してしまいます。生産者向けの切り花講習会から、一般向けのガーデニング関係

まで、各地へ出かけました。規模や形式、条件はさまざま。悪天候で数名というときもあり、一番多かったのは、大田区の花とみどりのまちづくりで200名くらい。みなさんの熱気に圧倒されそうです。30名前後がちょうど良いようで、NHK学園やRHSJなどがこのくらいでした。

その他にも、咲くやこの花館、武蔵丘陵森林公園、農大の花卉懇談会、クリスマスローズ協会などで、サンシャインシティのセミナーも何度かあります。宿根草やハーブの話、小売りの現場の話が主です。

一度、やまぐちフラワーランドからエディブルフラーの依頼があり、なんで私がエディブルフラー？と思いましたが、とにかくいろいろな花を味わってみることにしました。蜜の味で同じようなものも多く、ヘメロカリスやユッカの花は、なかなか食べ応えがあり、バラの花は意外にまずいことがわかり、トリカブトの花弁は味も素気もなく拍子抜けです。

講演で一番緊張したのは、塚本洋太郎先生の植物分類研究会です。横井先生がメンバーの1人ということもあります。何か話をしてほしいと頼まれました。大学教授や植物園園長さんなどを前に、なんとか、ティコフィレアやコナンテラなどの話をしましたが、もう冷や汗ものです。

話をしたり、原稿を書いたりというのは、良い勉強になります。なるべく、これまで考えもしなかったことや、知らなかったことを盛り込むよう努めてはいます。参考書は、内容だけでなく、書き方や表現方法もよく見るようになっています。

これまで多くの人に支えられてきました。恩はバスしなければなりません。ペイフォワードです。これを心がけていきたいと思います。



園芸文化展 新宿御苑